

1. 幼児期の食生活における間食の重要性は栄養、心理両面からみてもかなり高い。しかし、その質および量の適性についての研究はあまり行なわれていない。今回公立養護施設の全面的な協力を得て間食投与試験を行なったので報告する。

2. 対象は3～4歳児9名、研究期間は昭和40年11月26日から12月13日までの18日間、これをコントロール期(平均140 Cal)、高糖質間食期(200 Cal、この中糖質 Cal 76.4%)、高脂質間食期(200 Cal、この中脂質 Cal 88.7%)、に分けコントロール期は施設の普通の間食、高糖質、高脂質間食期には特別に調整したものを投与した。試験間食の適否の判定は主として間食投与後の食事の摂取量に対する影響、全栄養摂取量の変化等によった。高脂質間食期は幼児や世話をする人たちの緊張感が高まり、また、下痢症等が出たため1日早く打切った。

3. 高糖質の間食は5日間共子供達によく受入れられ、コントロール期よりも増加した間食熱量だけ総熱量摂取が増えた。また、ふだんの熱量摂取が少ないため、与えられた間食を全部摂取したとも考えられる。これは日頃の食事が無意識のうちに熱量不足になっていたのではないか、また、普通と異なった間食に刺激されて増加熱量が容易に受け入れられたが、この期間がもっと継続しても同じような状態が続くかどうか。

この解釈に当たっては更に多面的に検討する必要がある。